

200カイリ水域内漁業資源総合調査事業一区（ヒラメ）

伊口 航平

【目的】

この調査は、200カイリ水域の設定に伴い水域内のヒラメ資源を評価し、資源の維持培養及び高度利用の推進に資するための基礎資料を整備するために、全国的な調査の一環として実施した。

【方法】

1 生物調査

主要港（阿久根）における漁獲物の尾叉長・体重・生殖腺重量を測定した。

2 水揚量推定

平成29年農林水産統計年報におけるヒラメ水揚量を当センターの水揚市況データベース管理システム（以下水揚げシステム）で収集した平成29年のヒラメ水揚量で除して算出した係数に、水揚げシステムで収集した平成30年のヒラメ水揚量を乗じて平成30年の水揚量を推定し、国立研究開発法人水産研究・教育機構に提出した。この水揚量推定は東シナ海側と太平洋側に分けて行った。

これは、本県で漁獲されるヒラメが東シナ海側は日本海西部・東シナ海系群、太平洋側は太平洋南部系群に属すると考えられているため、海域で分けて推定したものである。

【結果】

1 生物調査

令和元年度は、1～3月に雄18尾、雌17尾を測定した。

尾叉長組成を雌雄別に示す（図1）。

雄の平均尾叉長（最小～最大）は、416mm（296mm～506mm）だった。

雌の平均尾叉長（最小～最大）は、478mm（359mm～642mm）だった。

尾叉長は雌の方が大きい傾向にあった。

生殖腺の発達状況（GSI：生殖腺指数＝生殖腺重量/体重×100）を雌雄別に示す（図2）。

雄の平均GSI（最小～最大）は、1.2（0.3～2.3）だった。

雌の平均GSI（最小～最大）は、4.6（2.4～7.6）だった。

GSIは雌の方が大きい傾向にあった。

2 水揚量推定

平成30年の推定水揚量は、東シナ海側で40.9トン、太平洋側で5.6トンだった（図3）。

【今後の課題】

近年、本県でのヒラメの水揚量は減少傾向にある（令和元年度鹿児島県水産技術開発センター事業報告書 豊かな海づくり広域推進事業-II）。今後も水揚量の動向を注視するとともに基礎的な生物学的情報の収集・蓄積に努める必要がある。

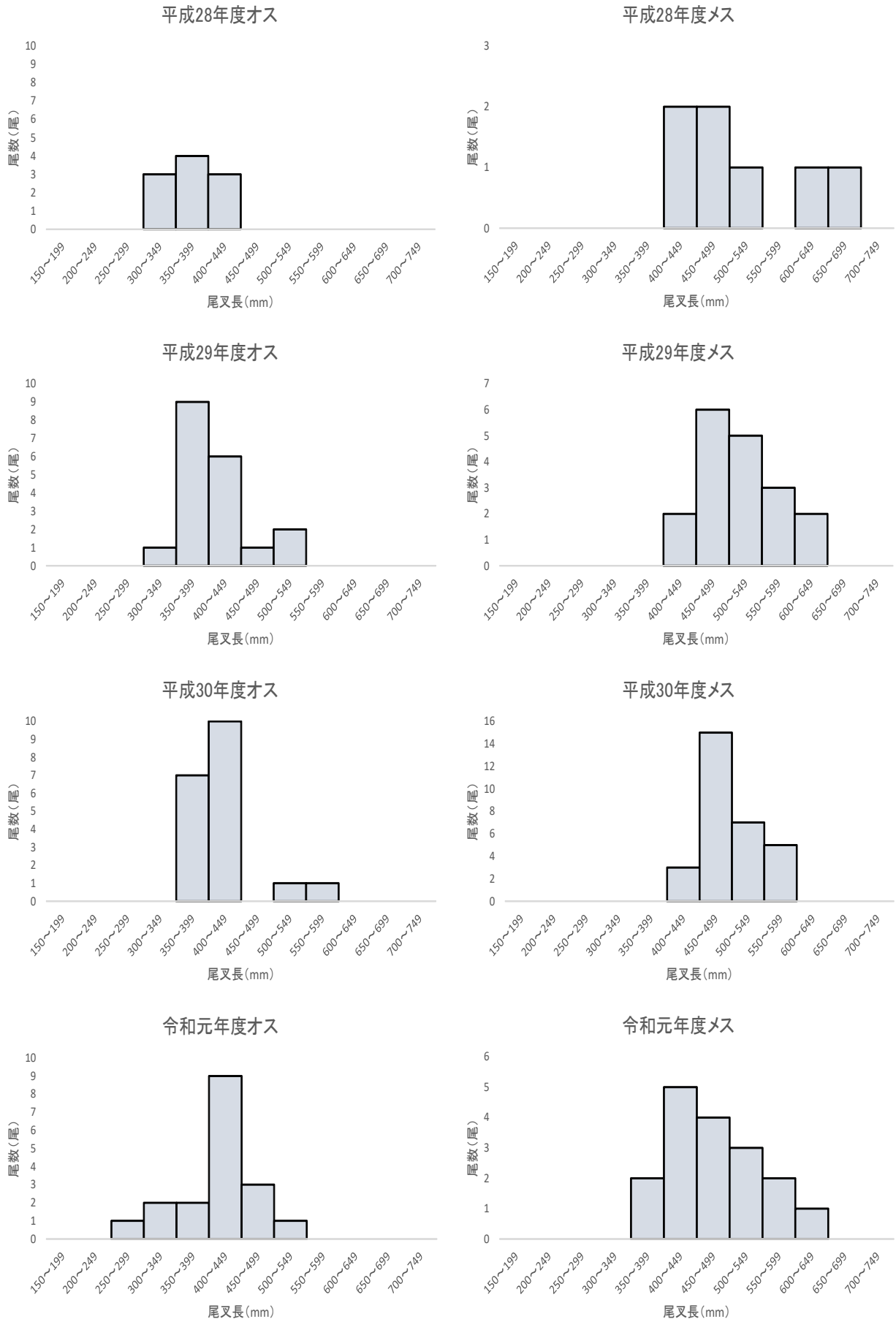


図1 阿久根港におけるヒラメ雌雄別の尾叉長組成 (H28~R元)

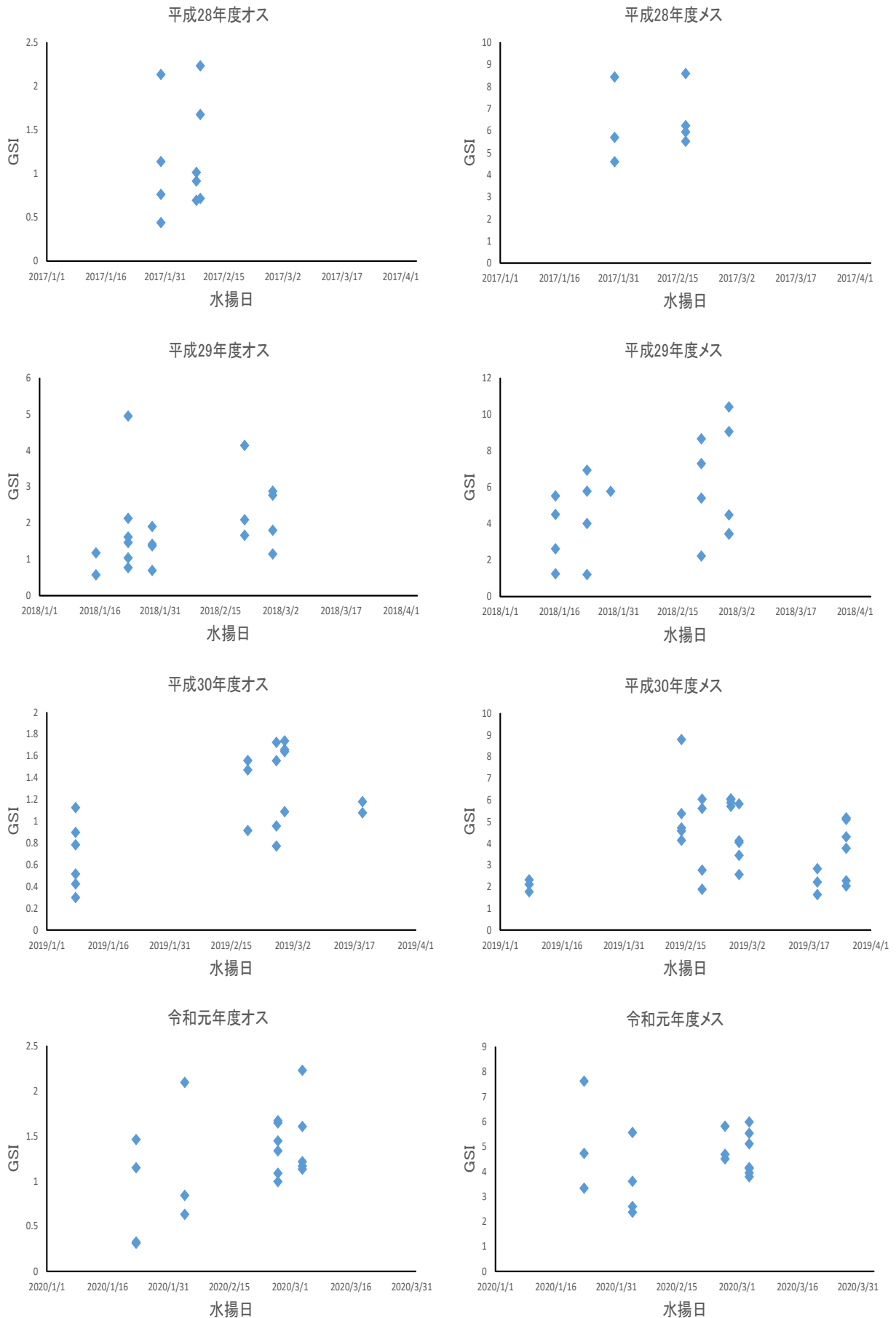
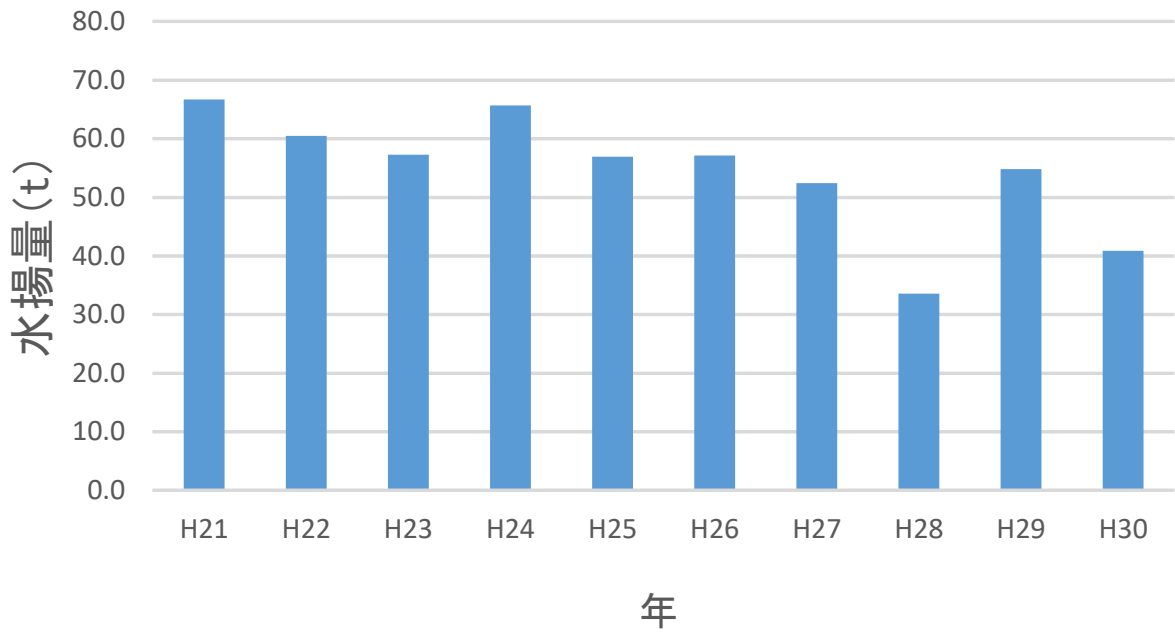


図2 阿久根港におけるヒラメ雌雄別のGSI (H28~R元)

ヒラメ推定水揚量(東シナ海側)



ヒラメ推定水揚量(太平洋側)

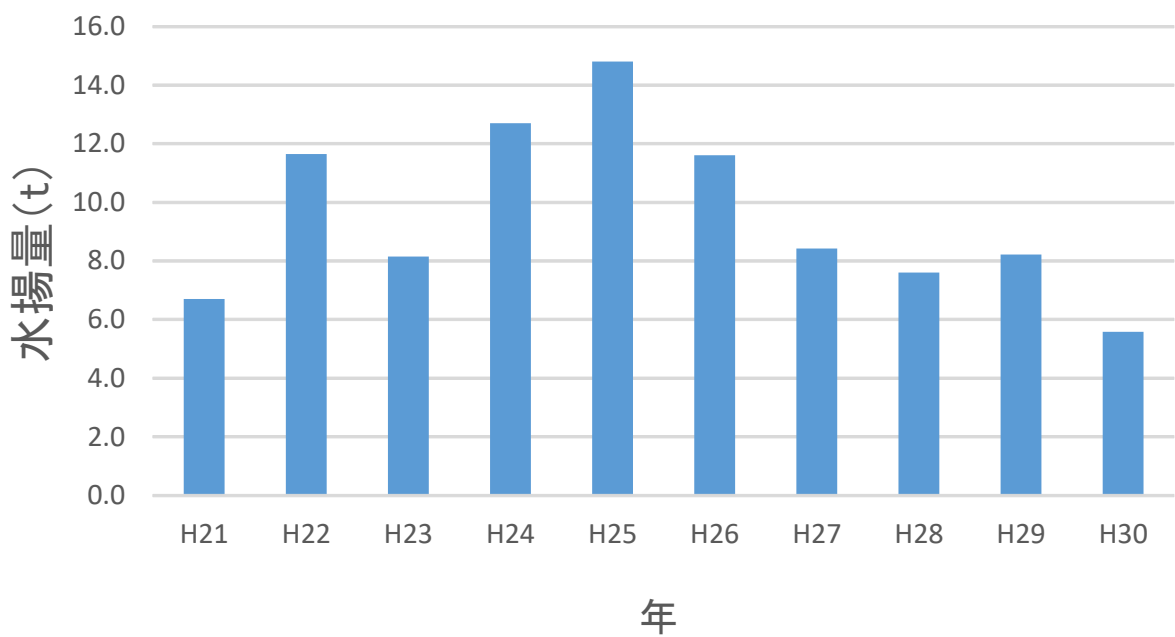


図3 東シナ海側, 太平洋側の推定水揚量 (H21~H30)